

## 「ルカノール伯爵」 (了)

—パトロニーオの書—

ドン・ファン・マヌエル  
木原 太 源 訳第五十話「サラディーンと<sup>(45)</sup>

## 家臣の妻に起った事について」

ある時、ルカノール伯爵は助言者パトロニーオとこのように話をされた。

「パトロニーオ、予はお前が叡智に溢れ、今や領内にはお前に優る助言の出来る者などおらぬことは百も承知しておる。そこで、予はお前に、人が身に備え得る最も優れた徳性とは如何なるものか言ってもらいたい。こう訊ねるのも、最良のものを選り出しそれを実行し得るには多くの徳性が必要なのは承知しておるので、それが分かかっておりながら活用せねば、富や名を高められるとは思わぬからだ。徳性は数々あるが、少なくとも一つは自分の物にし常に忘れぬよう心掛けておきたい」

「ルカノール伯爵様」とパトロニーオは返答した。「過分のお誉めにあずかりました上に明達であるとお言葉恐れ入りませぬ。しかしながら伯爵様、殿は誤解なさっておられるのではございませぬか。ご承知おきいただきたくは、我々がいとも容易く誤解することに、人物を知ることとその人物の見識を評価することに異なるのは間違ひございませぬ。この二つは異なり、前者はどのような人物であるかを、後者はその知性の程度を知ることにあるからでございます。如何なる徳性を有す人物であるかを知るには、その人物が神や現世のためになす行為を観察しなければなりません。大方の者は善行を行っていると思っているのですがそうでございませぬ。彼らの善行は総て現世の為だけで、このような行為は大きな代償を払うことになるとお考え下さい。すなわち、一時の行為により永遠の罰を被ることになるからでございます。また神に仕えるために善行をなす人もおられます。このような方は現世のことに心を奪われたいは致しません。免除されない忘れてはいけない人としての本分を優先させておられるのでございます。しかしながら、両者共神と現世の両方に心を配ってはおおりませぬ。両方に心を配るには善行と叡智が必要なのでございます。それは火傷をせずに火中に手を入れる如く困難なことであります。しかしながら、神の御加護を以て自助に努めれば何事も叶えられるのでございます。これまで多くの立派な国王や聖人方がお出になられました。このような方々は神と現世に心をお配りになられたのでご

ざいます。また、叡智ある人物を見分けずには、多くのことを観察する必要があります。功言や大言を吐く方は多々おられますが、その言葉にふさわしい振る舞いをなさる方はおられないのでございます。ところが、振る舞いは立派でありましても正当に三言も口が利けなかったり、利こうともしなかったり、或は嘔者であつたりする方もおられます。また、弁が立ち更に振る舞いも立派でありますのに、邪な心の方もおられます。他人に迷惑をかける手前勝手な方があります。このような人のことを福音書は、手に刃物をもつ狂人或は強大な権力を掌握している暴君の如き者である、と述べております。ところで、殿及び総ての方が神や現世にとって為になるのは誰か、そして良識や信言や善意を有すのは誰であるかをお分かりになられます。は、すなわち正しくそのような人物を見分けられますには、短期ではなく、長期にわたって行われた行為と、所領や富の増減から判断されるのがよろしいのでございます。この二点から前述のこと総てが分かるのでございます。

殿のお誉めと明達であるとお言葉から、私の所見を申し上げることになりました。かようなことを何もかもご承知の上でございませば、殿はこれほどには私をお誉めになられないのは確かでございます。人が身に備え得る最も優れた徳性は何かとのお訊ねに、その真実をお解りいただきますために、サラディーンと彼の家臣である騎士の妻なる貞淑な女性とに持ち上げりました事についてお聴きいただきますれば幸でございます」

伯爵はそれがどのような話であるのかお訊ねになられた。

「ルカノール伯爵様」とパトロニーオは語り出した。「サラディーンはバビロニアの君主でございました。常時大勢の家臣を随伴させておられましたから、全員同じ所での宿泊は叶いませんでした。そこで、サラディーンはある騎士の邸へお泊まりに行かれました。騎士はご威勢高いご主君を自邸にお迎えしましたので、心から歓持致しました。彼の妻子達も心を尽くして持て成したのでございます。ところで、悪魔は人倫に悖ることを人に行わせるよう常に努めておりますので、サラディーンの心に、果さねばならない自分を忘れさせ、騎士の妻に不倫の恋を抱かせたのでございます。その恋慕の情は激しく、ついに欲望を遂げる手だての相談を佞臣に持ち掛けるに至ったほどでございました。そこで、殿にご承知おきただかねばなりません。臣民は総てご主君を邪欲からお守り下さいと神に懇願せねばならないということでございます。それは、もしご主君が悪事を働こうと望まれると、それに口添えしたり、手を貸そうとする者が必ずいるのは間違いないからでございます。同じことがサラディーンに持ち上がりました。情欲を満たし得る手だてを助言する者が直ちに見つかったのでございます。佞臣はご主君にこう進言致しました。『彼女の夫を呼びに遣られまして彼を重用なさり、大勢の部下をお与えになられて、その数日後には遠方の地へ赴任させられることでございます。騎士が彼の地へ参れば殿は欲望を遂げられましょう』」

サラディーンはこの考えに満足すると実行に移しました。騎士がご主君との親密な間柄をとでも有り難く思つて任地へ旅立ちますと、早速サラディーンは彼の邸へ向かったのでございます。貞淑な妻はサラディーンの来訪を知ると、夫に多大のご好意を賜つておりましたので大歓迎し、家族全員で心から歓待致しました。饗応が終り寢所へ退いたサラディーンは、早速彼女を呼びに遣りました。ご用命のことを考えながら彼女は馳せ参じました。ところが、サラディーンはお前がとでも気に入つておると申されたのでございます。彼女はこの言葉を耳に致しました時、彼の真意を十分察知しましたが、解せぬ振りを装うと、『神が殿に長寿を授けられますように』、さらに『私は神に感謝致しております。私が殿のご長命を願つて、努めてございませぬので、常に殿のためにお願ひ申し上げますことを神はよくご存じだからでございます。殿はご主君であられますし、夫や私に多大のご好意を下賜なされたのでございますから』と申し上げました。

サラディーンは彼女の言葉を無視すると、世の誰よりもお前を気に入つておると告げられました。彼女はとても感謝致しましたが、彼の心中を測りかねる振りを装つたのでございます。殿にはこれ以上長々と申し上げは致しません。サラディーンはどれほど彼女を気に入っているかを明言しなければなりません。貞淑な妻は彼の告白を聞くと、良識と分別を有す女性でしたので、サラディーンにこのように応えました。

『殿様、私は取るに足りぬ女ではございますが、恋慕の情は人間の意のままになるものではなく、むしろ人間の方が意のままに扱われておりますのを熟知致しております。また、仰せのように、殿が私にたいそう気がおありでございますならば、そのお言葉は真実であろうかと思ひますが、そうではないかもしれませぬことも承知致しております。殿方、とりわけ高貴の方は女性を気に入られますと、望みは何なりと叶えてやろうと申されます。ところが、女性は弄ばれた後は冷たくあしらわれるのが落ちで、そして当然のように名譽を失うことになるのでございます。私は、殿様、同じ目に会うのではと懸念致しておりますのでございます』

サラディーンは、彼女の不安を払拭しようと、幸せになれるよう望みは何でも叶えてやると約束したのでございます。貞淑な妻はサラディーンのお言葉を受けて、『私の名譽を無理に汚し辱められます前に、私の願ひを叶えて下さることをお約束いただけますれば、それが果されました暁には、お命じなさいませぬこと何なりとやることをお約束申し上げます』と返答したのでございます。するとサラディーンは『そのことにこれ以上触れないようにと乞われるのが心配だ』と応えました。そこで彼女は『そのようなことも、お出来にならないようなことも求めたりは致しません』と応じたのでございます。そこでサラディーンは彼女に約束なさいました。貞淑な妻はサラディーンの御手と御足に口付けすると、『お願い申し上げますことは、人が

身に備え得る最も優れた徳性、すなわちあらゆる徳性の大本おんもとは何かをお述べ下さい』と申し上げたのでございます。

サラディーンはこの問い掛けに熟考を重ねましたが、彼女に何と応えてよいのか分からなかったのでございます。そこで、約束を果すまでは彼女の名誉を強引に汚したり辱めたりはしないことを約束しておりましたので、この問題を深く掘り下げて考えたいと申し出られました。すると彼女は『お応えがいただけましたらいつ何時でも、お命じになりますことは何なりと果す所存にございます』と返答致しました。

両者の間でこのように申し合わされました。サラディーンは家臣達の所へ戻ると、他の事に事寄せて総ての賢者にこの問題を訊ねました。ある者は、人が身に備え得る最も優れた徳性は善心である、と述べました。すると他の者が、善心は来世には通用するが、それだけを備えていても現世の為にはならないだろう、と反論しました。またある者は、最も良いことは忠義に篤い人間になることだ、と主張しました。すると他の者が、忠義に篤いことは非常に結構なことではあるが、人は忠臣にも卑怯者にもまたは欲張りや愚か者あるいは曲者になるかもしれないのだから、忠義に篤いだけでは不十分だ、と反論しました。このようにあらゆることで互いに考えを述べ合ったのですが、サラディーンの問いに確答することはできなかったのです。

領内に自分の問い掛けに返答や確答の出来る者が皆無である

のが分かりますと、サラディーンは二人の旅芸人を探して来ました。彼らを同行させれば諸処を巡るのに好都合であったからでございました。彼は密かに渡海すると教皇庁へ赴きました。そこは方々からキリスト教徒が参集する所でありましたので、同じことを訊ねて回りましたが応えてくれる者を見い出せず、そこからフランス王の宮廷や他の諸侯を訪れましたが同じ結果となりました。このことに多くの日時を費やしたものですから、彼は始めてしまったことを後悔しておりました。あの女性を自分の物にしたいということだけでしたらとつくに止めていたのですが、彼は偉大な人物でありましたから、やり始めたこととの結末を見届けるのを諦めれば名を腐くたすと考えました。身分ある者が、悪事でも罪作りな事でもないのに、一度ひとたびやり始めたことを放棄すれば、不名誉なこと間違いないからでございませぬ。さらに労を厭いといあるいは惜しむが故に止めるならば、恥ずかしくて弁明も叶いとわぬであります。それ故、サラディーンは領地を後にした時のように、未解決のままにしておきたくはなかつたのでございます。

ある日、旅芸人達との旅の途中で、偶然にも射止めた雄鹿を持って狩りから戻って来る一人の郷士と出会であひました。郷士はほんの少し前に妻を迎えたばかりでした。彼にはかつてその地方切つての優れた騎士でありました年老いた父親がいました。高齢故に視力を失っておりましたので外出は叶いといませんでしたが、老齡を感じさせない明晰な頭腦の持主でありました。

郷士は上機嫌で狩りから戻る途中でしたから、『どちらからお出になったのですか？ どなたですか？』と三人に尋ねました。彼らは旅芸人であると応えました。この返事に大喜びすると『気分を良くして狩りから戻るところなのです。この嬉しさを完全にするために、あなた方は素晴らしい旅芸人なのですから、今夜私とお過ごし下さい』と頼みました。すると彼らは『私達は急ぎの旅の途中でして、あることを知るために国許を出立して以来随分と月日を重ねて来ました。ところが満足のいく説明の出来る人に出会えず、帰郷しようと思っっているのです。今夜一緒にすることは叶いません』と告げたのでございます。ところが郷士があれこれ訊ねたものですから、彼らは旅の目的を言わざるを得なくなりました。郷士は事情が分かると『あなた方のお知りになりたいことに私の父が応え出来なければ、出来る人などこの世にいないでしょう』と告げると、彼らに父親の人物について語ったのでございます。

サラディーンは、郷士に旅芸人と思われておりますが、これを聞いてとても喜びました。そこで三人は彼に同行しました。一行が郷士の邸に着きますと、彼は満足のゆく狩りであったので上機嫌で戻って来たことや、おまけに旅芸人達を連れて帰って来たので上々の気分であることを父親に語った後、彼らが訊ね続けている事についても述べると、『父上のお考えをこの方々にお伝へ下さい。納得される考えを述べられた方に出会っておられませんので、父上がお応えにならなければ、今後もお

来るお方に会われないうから』と頼みました。

老騎士は息子の話を聞くと、このような問いをする者は旅芸人ではないと悟りましたので、『食後にお訊ねの件にお応えしよう』と息子に告げたのでございます。そこで、郷士は旅芸人であると思っておりますサラディーンに伝えますと、食後まで待たねばならないのはこのうえなくじれったいことでしたが、彼はとても感謝しました。

卓布が取り除かれ旅芸人達が芸を披露し終えると、直ちに老騎士は『息子が申すには、あなた方はある事を訊ねる旅をなさっておられるも、応答出来る人に出会っておられないの由』私にそれをお聞かせ下さい。さすれば私の考えをお述べ致します。』と彼らに告げたのでございます。

そこで、旅芸人を装っておりますサラディーンは、『お訊ねしたいのは、人が身に備え得る最も優れた徳性、つまりあらゆる徳性の大本は何かでありませう』と応じました。

老騎士はこの問いを聞くとその意味を十分理解しました。さらに話し方から質問者はサラディーンであることを悟ったのでございます。昔、長い間彼の宮廷で起居を共にし、格別の引き立てと好意に与かったことがあるからでございます。そこでこのように申したのでございます。『友よ、私が最初にお応えすることは、明らかに今日まで一度もこのような旅芸人がわが家の敷居をまたいだことはない、というのでございます。そしてご承知おきいただきたくことは、当然のことながら私はあ

なたから与かったご好意の数々に感謝申し上げねばならぬのですが、あなたのお訊ねが他の者の耳に入らぬよう余人を交えずにお話しするまでは、今は何も申し上げぬことに致します。ところで、私へのお訊ね、人が身に備え得る最も優れた徳性、すなわちあらゆる徳性の大本は何かでございますが、このようにお応え致します。それは恥を知る心であります。名誉を重んじるが故に、人は最も由々しきことであります死をも甘受するのでございます。また廉恥心故に、人はぜひやってみたいと欲する悪しき事も断念するのです。それ故、恥を知る心はあらゆる徳性の大本であり、総ての悪事を遠ざけるのでございます』

サラディーンはこの詳細な説明を聞くとき正しく騎士の言った通りであることが分かりました。彼は不明であった事が明らかになりましたので歓喜すると、世話になった騎士と郷士に別れを告げました。ところが、彼らが邸を立ち去る前に老騎士は彼に話し掛けました。彼がサラディーンであることが分かった理由を述べると、かつて彼から与かった好意の数々を語ったのでございます。そこで、彼と息子は精一杯の持て成しを致しました。しかしながら彼の素性が覺られないように心がけたのでございます。

何もかもが終わると、サラディーンは大急ぎで国へ戻るために出立致しました。領地に帰着した彼は家臣一同から大歓迎を受け、その後帰国祝いが盛大に行われました。祝宴後サラディーンは例の問いを出したあの貞淑な女性の邸へ出掛けまし

た。サラディーンの来訪を知った彼女は丁重に迎え入れると精一杯持て成したのでございます。

さて、サラディーンは食事を終え自室へ退くと、彼女を呼びに遣りました。彼女が参りますと、訊ねられた事への正答を捜し当てるのに払った苦勞の数々と、捜し当てたその正答を約束通りに与えられるので、彼女にも約束を果してもらいたいと告げたのでございます。すると彼女は『どうかお約束なさいました事をお守りいただきまして、私の問いにお応えなされて下さいませ。そして、殿ご自身がそのお応えは申し分のないものであるとお考えのものでございますならば、私はお約束致しました事を喜んで果す所存でございます』と言明致しました。サラディーンは彼女の言葉に満足すると、彼女が訊ねた人が身に備え得る最も優れた徳性、すなわちあらゆる徳性の大本は何かとの問いに、恥を知る心である、とお応えになったのでございます。

貞淑な妻はこの返答を聞くと大喜びし、次ぎのように申したのでございます。『殿様、殿は眞理を語っておられます上に、私へのお約束をお果しなさいましたことが分かりました。そこで殿にお願い申し上げます。王には眞実を述べる義務がございますので、殿に勝る立派なお方がこの世にお出になるとお考えでございますなら、どうかお聞かせ下さいませ』

言うのは気恥ずかしかつたのですがサラディーンは王として眞実を述べねばなりませんので、『予よりも優れた者はおら

ぬ。予は誰よりも優れておると思う』と断言なさいました。

この言葉を聞くと、貞淑な妻は彼の足下にひれ伏し、さめざめと泣きながらこう申したのでございます。『殿様、ただ今殿は二つの立派な至言を申されました。一つは殿がこの世で最も立派なお方であると。もう一つは廉恥心が人の身に備え得る最も優れた徳性である、との二つでございます。殿様、今や殿は恥を知る心を弁えておられますし、この世で最も立派なお方でもございませぬからには、どうかこの世にあって最も優れた徳性であります廉恥心をご自分のものになされていただきまして、私に申されましたことを恥とお考えいただきたいのでございます』

サラディーンは心に染みる言葉を耳にし、さらにこの貞淑な女性が、善心と良き分別により、彼が重大な過失を犯さぬようどのように導いてくれたかをお悟りになると、心から神に感謝されたのでございます。これまでは彼女に不倫の恋を抱いておられました。以後は名君が臣民のために有たねばなりません。誠実で高尚な愛情を抱かれることになりました。そこで、彼女の善心に報いるために、彼女の夫を帰還させる使者をお送りになつたのでございます。そして、二人に格別の処遇と恩賞を下賜されましたので、彼らの子孫はその辺りの中では際立って幸福になつたのでございます。

この善事は総てあの貞淑な妻の善心から生じたものでございます。彼女が、恥を知る心は人が身に備え得る最も優れた徳性、すなわちあらゆる徳性の大本であることを悟られるように

導いたからでございます。

ところでルカノール伯爵様、殿は、人が身に備え得る最も優れた徳性は何か、とお訊ねでございますので、それは恥を知る心であるとお応え申し上げます。何故なら、廉恥心は人を勇敢にして寛大、誠実にして礼節ある者にし、立派な振舞いをさせるからでございます。人がこのように振る舞うのはそうしたいと願うから行おうのではなく、廉恥心があるから行おうものであることを十分お心得下さい。また、廉恥心のお陰で、人は欲望に駆られて行おうとする不当な行為を止めるのでございます。それ故、なすべきではないことをしたり、義務を果さずにおくことは恥であると悟るのは、とても立派なことであり、羞恥心無くすことは有害で醜悪なことなのであります。殿にお分かりただかねばなりません。破廉恥な行為をなしたり、他人に覚られずに行つたので恥ずかしく思う必要はないと考える人は、大変な過ちを犯しているということでございます。またご銘記いただきたくことは、人の目に触れぬよう如何に努めようと、いつまでも覚られずに済むものは皆無である、ということでございます。破廉恥な行為の直後、それが他人の目に触れなかったからといえ、表沙汰になつた時の面目の無さを考慮しておかねばなりません。たとえ恥を曝さなかったからといえ自ら恥辱を覚えることが肝要です。己の行為が面目無きものであることは承知しておるのでございますから。このようなことが一切考え及ばぬ時は、(もし若者が自らの行為に気付けば恥

ずかしくて止すだろうぐらいは分かるのですが、止めもせず羞恥心も無く、また、一切をご覧になり総てを熟知なさっておられる神の恐れを有たぬことは、どれほど不幸であるかを考えるべきなのでございます。神は行為にふさわしい罰を下されることは間違いないからでございます。

さて、ルカノール伯爵様、私は殿のお訊ねにお応え申し上げました。これを含めて五十のお訊ねに対してお応え申し上げたこととなります。そのために殿には長々とお時間を取らせすることになりました。ご家臣方の多くはご退屈であるに違いありません。とりわけ、有益なことを聞きたくも学びたくもないお方は必ず倦うんざりなさっておられます。このような方は金を担って歩むラバの如きものでございます。背負っている金の重さは感じてでもその価値が分からないからでございます。これらの方も聴いている話に退屈を覚えるだけで、聴いて為になりまして役立つ話を利用なさらないのでございます。ところで、私はこれ以上はお応えしたくはございません。それは、このようなことや多数のお訊ねへのお応えに疲れたからではございませんで、この話と次のとで本書を終わりにしたいが故でありますことを申し上げます」

伯爵はこれをとても有意義な教訓談であると判断された。そしてパトロニーオがこれ以上はお訊ねなさらないで下さいと述べたことに、そうすることにしようとお応えになられた。

ドン・ファンはこの教訓談を非常に有益であると考えたので

本書にそれを記させた。そして次のような二行詩を作った。

廉恥心は総ての悪を遠ざける、  
廉恥心により人は自然と善をなす。

この物語はこれで終わるが、話はさらに続く・・・

## 第五十一話 「強大な権力を有す尊大なるキ

リスト教徒の王に起った事について」

またある時、ルカノール伯爵が助言者パトロニーオと話をしておられた際、このように語られた。

「パトロニーオ、あまた数多の者は、人が神の下で得られることの一つに謙虚な心がある、と申す。一方では、謙虚な者は人に見くびられ、意気地の無い臆病者と見做みされることから、偉大な君主は尊大に構えるのが似つかわしく有利である、と申す者もいる。そこで予は、偉大な君主の取るべき態度をお前以上に心得ておる者のおらぬことは承知なれば、予が取らねばならぬ最もふさわしい態度は何れなのかを進言してもらいたい」

「ルカノール伯爵様」とパトロニーオは返答した。「何れが最良にして最もふさわしい態度であるかをお分かりいただけますには、強大な権力を有す尊大なるキリスト教徒の王に起こきました話をお聴きいただきますれば幸でございます」



伯爵はそれがどのような話であるのか聴かせてくれるようにお頼みになられた。

「伯爵様」とパトロニーオは語り出した。「名は思い出せませぬが、ある国に強大な富と権力に恵まれました青年王がお出になりました。この王はそれはそれは尊大な王でございました。

その尊大振りには、王が聖母マリアの賛歌 “Magnificat anima mea dominum”<sup>(46)</sup> の中の “Deposit potentes de sede et exaltavit humiles” つまり、*“われらが主なる神はおこり高ぶる権力ある者を王座から引きおろし、卑しき者を引き上げられた”* の章句をお聞きになられました時に發揮されました。王はこの詞をお聞きになられると非常に口惜しく思われましたので、国中にその章句を抹消し代わりに *Ex exaltavit potentes in sede et humiles posuit in natus*、つまり *“主はおこり高ぶる権力ある者を王座に引き上げられ、卑しき者を引きおろされた”* と記すようお命じになられたのでございます。この行為は神をとて悲しませました。聖母マリアがこの賛歌の中でお詠みになったのは正反対であったからでございます。無垢なる永遠の処女のままで懐妊し産むことになる神の子の生母になるのをお知りになり、また神の国と地上の母となるのがお分かりになられた時、自ら徳の中の徳である謙虚を称えて次のように詠まれたからでございます。 “Quia respexit humilitatem ancillae suae, ecce enim ex hoc benedictam me dicent omnes generationes”, つまり *“主はこの卑しい女をさえ、心にかけて*

くださいました。今からのち代々の人々は、わたしをさいわいな女と言うでしょう”<sup>(48)</sup> という意味でございます。事実その通りとなり、彼女の以前以後に幸いな女性は一人も存在し得ず、優しさ、とりわけ謙虚という美德により、神の生母にして神の国と地上の女王そして天使の合唱隊の聖母になられたからでございます。

しかしながら、尊大な王には全く逆の事が生じたのでございます。ある日、湯屋へ行きたくならぬので、お供を引き連れ大威張りで向かわれました。湯屋へ入り裸になられると衣服を湯殿の外に置かれました。王の入浴中に我らが主なる神は天使を湯屋へ遣わされたのでございます。天使は神のご意向を酌むと王に形すまし、王の衣服を身に付けると湯屋を出、王の家臣を引き連れ城へ向かわれました。天使は湯殿の入り口の外側にぼろの古衣を残されました。それは門口で施しを求める乞食が身に纏っている物でございました。

王は事態に全く気づかずに湯舟に入っておられました。そこで上がろうと思われ、随行して来た侍従や家臣達を呼ばれたのでございます。ところが、いくらお呼びになられましても誰一人応答しなかつたのでございます。一同は、王に随行していらっしゃると思っておりましたから、すでに立ち去っております。応える者が誰一人おらぬことに気付かれますと、王は激怒し、全員残酷な目に会わせて殺させてやる、と罵り出されたのでございます。愚弄されたとお考えになられましたので、王は裸のま

まで湯舟を飛び出されました。衣服を差し出す者ぐらいいはいるだろうと推われたからでございます。供の者がいると思っておられました脱衣場にいられても、その姿が一つも目に入りませんので、湯屋の隅々までご覧になられたのですが、命令出来る者誰一人として見つからなかったのでございます。果然となりどうしてよいか分からなくなりました時、片隅に投げ捨てられてあるあのぼろの古衣が目に入りましたので、それを身に付けようとお考えになられました。つまり密かに城に戻り、さんざん愚弄した家臣達に容赦なく報復してやろうとおもわれたからでございます。そこで、古衣を纏われますと人目に触れぬようご帰城なさいました。熟知している上に湯屋へ同行した一人の衛兵が城門にいるのをご覧になると、そっとお呼びになり、『城門を開けて密かに中へ入れてくれ。このような卑しい姿で戻って来たのを誰にも知られたくないのだ』とお命じになりました。

見事な太刀を腰に帯びこまれた見事な槌鉾手に持っておりました衛兵は、『何者だ、何故城内に入りたいのだ』と誰何致しました。そこで王はこのように申されたのでございます。

『この裏切り者奴！ お前は予を湯屋に一人放置し、あまつさえこのような卑しい身形で戻らせておきなから、まだ愚弄するつもりか？ お前は何某ではないのか？ 何故予が、湯屋に取り残したお前の主君の王であることが分からぬのか？ 予を知る者が来ぬ前に門を開けるのだ！ さもなくば苛酷な目に会

わされて命を奪われるものとしかと心得よ』

すると、衛兵はこのように申したのでございます。

『下衆な痴者奴が！ 何をほざいておる？ さっさと失せろ、さもないとこれ以上たわけたことをほざけば、気違いとしてお前をたっぷり懲らしめてやる。王は随分前に湯屋からお戻りだ。我ら一同王にお供して帰城したのだ。王は食事をお済ましなされてご就寝なさっておられるわ。お目覚めさせぬようここで騒ぎ立てぬよう気を付けろ！』

王はこのような言葉をお聞きになりました時、自分を愚弄するために言っておるとお考えになりましたので、腸が煮え練り返るほどの腹立たしさと情けなさに怒りが込み上げて来、衛兵に飛び掛かって頭髪をわしづかみにしようとなさいました。ところが衛兵は王の急襲を目にすると、鉾の先で負傷させたくはなかつたものですから、柄の方で思い切り殴りつけたのでございます。すると、辺り一面に血が飛び散りました。王は負傷したことがお分かりになりましたし、衛兵は見事な太刀と槌鉾を持っているのに引き換え、ご自分は攻防し得る武器何一つ手にしていないことに気付かれました。さらに衛兵の正常ではない様子から、これ以上しゃべれば恐らく殺されるだろうと不安に駆られましたので、執事の邸へ行き、そこで傷が癒えるまで身を隠し、治癒後、このように玩弄した裏切り者全員に報復してやろうとお考えになられたのでございます。

ところで、執事の邸へ行かれましたところ、その門前では城

門の衛兵から被られたのよりもさらに酷い目に会われたのでございます。そこで、人目を忍んで妻である王妃の館へお行きになりました。この悲劇は明らかに家臣達に認知されないことか  
ら生じましたが、世間の者が認めなくとも妻である王妃が認め  
ぬはずはない、と確信しておられました。ですから、王妃の許  
へ行かれますと、家臣達の酷い仕打ちとご自分は王であること  
を告げられたのでございます。ところが、王妃は王が城内にお  
出になると思っておられますから、このような馬鹿氣たことを  
耳にしているのをお知りになれば、ご気分を損なわれるので  
は、と懸念されましたので、棒での殴打をお命じになると、こ  
のような常識はずれのとんでもないことを吐く者を放り出すよ  
うお命じになったのでございます。

王は、哀れなことに、我が身の余りの不幸にどうしてよいか  
分からず、重傷の身を押しして施療院へお行きになり、そこで何  
日も過ごされたのでございます。そして空腹に苛さいなまれますと、  
戸口から戸口へ物乞いをして回られました。人々は、この国の  
王でありながらどうしてこれほどの貧乏になったのだ、と愚弄  
し囃し立てました。大勢の人が、絶えず、至る所でこう囃し立  
てましたので、王ご自身も、頭がおかしくなっているのです。こ  
国の王であると思ひ込んでいたのだと、お考えになりました。  
このようにして長い月日が経ちました。彼を知る総て  
の者は、多数の人に生じた氣違ひじみたことから、彼は狂人な  
のだと納得しました。つまり、彼は別人で心の有り様も全く異

なっていると考えたからでございます。

ところで、王の余りにも惨めな状態に、大罪を犯しているの  
でなければ、常に罪人の為を思われ救いの道へお導きなさいま  
す神の慈悲の御心は、傲慢さが原因もとですっかり零落してしまっ  
ております不運な王に、この不幸が自らの罪と胸中の尊大な念  
に起因するものであることを思い至るようにされたのでござい  
ます。とりわけ、先述の聖母マリアの賛歌の章句を、とんでも  
ない思い上がりで氣違ひ沙汰から、改ざんをお命じになったこ  
とに起因する、と考え及ぶようにされたのでございます。王は  
そのことに氣付かれましたので、言葉では言い表わせぬほどの  
大きな苦悩と悔恨の念に激しく苛さいなまれたされました。それ故、  
ご自分の王国を失われたことによる苦悩よりも、我らが主に対  
してなされた過誤による苦悩の方がはるかに大きかったのでご  
ざいます。己が身の不運のほどがお分かりになりましたので、  
王は涙を流し悲嘆にくれると、ご自身の罪の許しと魂へのお慈  
悲を神に求められたのでございます。王のこの上ない悲しみは  
自らの罪に起因するものでしたから、王位を取り戻し名誉回復  
を願って神の慈悲を求めるときには決して及びませんでした。  
王にはもはやこのようなものを有り難いと思ふ氣持ちはさらさ  
ら無く、唯々自らの罪の許しを得たい、魂の救済を得たいとの  
思いだけでございました。

ところで伯爵様、よくお考えいただきましたことは、神が肉体  
の健康及び名誉や富を授けられ、さらにそれらを守り増やして

くださいますようにと、巡礼や禁欲、布施や祈り、或は善行を行う総ての人が、悪行を働いてはおりませぬのに、罪の許しと、嘘偽りの無い真正銘の善行と善意によってのみ得られる神のお慈悲を授かるために、このような行為を行っているのでありますれば、やがて彼らの為になり、その上罪の許しと神のお慈悲を彼らは得るであろうことは間違いないということでございます。何故ならば神が罪人に一番お求めなさいますのは、謙虚な心と真っ正直であるからでございます。それ故、王が神のお慈悲を求めて、自らの罪を後悔なさると、神はその心底からの悔い改めと誠意をご覧になられ、直ちに王をお許しになったのでございます。神のお慈悲は広大無辺でありますので、罪深い王の総ての罪をお許しなされたばかりか、王国と名譽を以前よりも大きくしてお返しになられたのでございます。それはこのようにでございます。

王に代わって姿形も王に成り切っております天使は、一人の衛兵を呼ばれるとこのようにお命じになりました。

『この辺りを、自分はこの国の王であったとか、その他訳の分からぬことを多々申しておる狂人が徘徊しているとの噂を耳にしておる。是非ともどのような男でまたどのようなことを申しておるのか教えてくれ』

衛兵は、偶然にも、王が湯屋から乞食の身形で出て来られました日に傷を負わせた当人でございます。天使は、衛兵は王であると思っておりますが、狂人についてあれこれ訊ねられます

すと、彼は人々が狂人のとんでもないたわごとを耳にしては、からかったり、いたずらしている様子を語ったのでございます。衛兵が報告し終えたとすぐに、彼を呼びに行き連れて来るようお命じになりました。狂人扱いをされております王が彼に代わって王座にいます天使の前にやって参りますと、直ちに天使は彼と二人だけになりました。そして次のようにお述べになりましたのでございます。

『さて、予には如何なる不運或は事情によるかは分からぬが、お前はこの国の王であったが失脚した、と申しておるとの噂を聞いておる。どうかお前の身に生じたこれまでの経緯を包み隠さず語ってもらいたい。そのことでお前が酷い目に会うことは決してないと約束する』

狂人扱いをされております哀れで不幸な王は、王であると思っております方からこのような言葉を耳にし、何と返答してよいか分かりませんでした。探りを入れるために訊ねているのであって、もしそうだとすれば、相手は自分を殺すかこれまで以上の不幸な目に会わすのでは、と不安でなりません。それ故、激しく泣き出すと悲嘆にくれてこう述べたのでございます。

『王様、お申し出に対してどうお返事すべきか私には分からないのでございます。しかしながら、私にとりまして死はすでに生と同じぐらいすばらしいものであるかと理解しております(そして神は私がこの世の富や名譽に執着しておらぬこと

はご存じであります)ので、胸中の念を隠しておきたくはございません。王様、私は自分が狂人であることは分かっております。人は皆そのように考えておりますからそのように私を取り扱いますので、以前から私はそのようにこの地で過ごしておりますことを申し上げておきます。ところで、たとえどなたかがお間違ひになられても、私が狂人でなければ、善人であれ悪人であれ、大男であれ小男であれ、賢者であれ愚者であれ総ての人が私を狂人と考えることなどあり得ないであります。しかしながら、私にはそうであることが分かっておりますし納得も致しておりますが、私がこの国の王でありましたことや、王位を失うと共に、私の数多の罪、とりわけ心中に有す尊大で傲慢心が原因で、神の慈悲の御心をも失ったのは紛れも無い事実でございます』

その時彼は、他の数多の罪と共に、文言改ざんを命じてからの出来事を、悲嘆と涙にくれて語ったのでございます。そこで、彼の姿に成り代わって王位に就くよう神が遣わされました天使は、彼が失ってしまった王国や名誉よりも、犯した過誤をとて後悔していることが分かりましたので、神のご指示によりこのように述べられたのでございます。

『友よ、私は、あなたは正直に話されましたし、この国の王であったことも確かである、と言明します。我らが主なる神は正にあなたがお考えになっておられる通りの原因であなただを失墜させられたのです。そして、天使である私をあなたに成り代

わって王位に就くよう下されたのです。神の慈悲の御心は申し分なく、罪人の心からの改悛だけを願っておられますので、この思いもかけない出来事で以て、改悛が心からのものであるように二つの事をお示しになったのです。一つは二度と同じ過ちを犯さぬように、もう一つは終生の後悔であるように、の二つです。我らが主なる神は、あなたの悔い改めが心からのものであることがお分かりになりましたので、あなたをお許しになると、元の姿に戻し、国を返すよう私にお命じなさいました。私は二度と尊大という罪を犯されぬようあなたにご忠告とお願いをしておきます。これは、人間がその性により常に犯す罪の中でも、神が最も憎んでおられる罪であるからです。それは正しく神ご自身とその力に背くことであり、たやすく魂を破滅させるものであることをご承知おき下さい。この罪に陥って崩壊と破滅を免れたものは国であれ、一族であれ、階層であれ、個人であれ一つも無いことをしかとお心得下さい』

自らを狂人だと思っております王は天使のこの言葉を耳に致しました時、その足下に身を投じ号泣されたのでございます。そして天使の言葉を心に銘記されると、この神の御使いを神に代わって敬い礼拝されました。そしてこのすばらしい出来事を公にすべく、総ての臣民が参集するまで立ち去らないでいたきたいと懇願されたのでございます。天使は彼の願いをお聞き入れになりました。総ての臣民が参集しますと、王はこれまでの一切の経緯を明らかにされたのでございます。天使もまた神

のご意志により本来の姿で全臣民の前にお出ましになり、同じことをお述べになりました。王は我らが主なる神に数多あまたの罪の贖いをされたのでございます。その一つは、この出来事を忘却せぬために、王が改ざんさせられたあの文言を王国中に金文字で永遠に記されるようお命じになったのでございます。私は今日でもあの国では遵守されていると伝え聞いております。事が落着致しましたので、天使は送り出されました神の下へ戻られました。王は臣民と共に喜びと幸運を分かち合われたのでございます。それからというもの、王はとても真面目になられ、神への務めと民の幸福の為に数々の善行をなされましたので、この世での名声を得られると共に、来世の栄誉もお受けになられたのでございます。これは神が慈悲の御心から我々にお与え給うものであります。

ルカノール伯爵様、神のお慈悲とこの世の名譽を得たいと望まれますならば、善行をなさって下さい。善行は見せ掛けや偽善からなされぬことでございます。中でも尊大という罪から御身をお守りになり、素直で謙虚になられることでございます。しかしながら、謙虚になさるもご身分を損なわれぬ程度にでありまして、卑屈になられてはいけません。さすれば、尊大な君主達は殿の謙虚さには卑屈なところが皆無であるのを知っております。また、謙虚な方はこぞって殿が常に謙遜と慈善の士であると悟るでありますよ。」

伯爵はこの助言をとてもお喜びになられ、いつまでもこれを

守り果せるようお導き下さいと神に懇願されたのでございます。

ドン・ファンもこの教訓談を非常に気に入ったので本書にそれを記させた。そして次のような二行詩を作った。

謙虚な正直者を神は大いに称揚なさるが、  
尊大なる者には心に大きな傷を負わされる。

この物語はこれで終わるが、話はさらに続く・・・

(第一部 了)

#### 註

- (25) サラディーン Saladin 名はユースフ、別名サラフッディーン。十字軍遠征のキリスト教徒軍を通じてヨーロッパに知られる。以後時代を越えてその名はイスラム教徒軍の英雄の代名詞となる。(『アラブが見た十字軍』牟田口義郎・新川雅子訳、リポート刊、一九八六年。を参照)
- (46) ルカ伝第一章四十六、わたしの魂は主をあがめ。(日本聖書協会編一九五五年改定版)で始まる賛歌。
- (47) 同右第一章五十二
- (48) 同右第一章四十八